

(開演 2時)

親世流 能 忠 度

前シテ/尉 後シテ/平忠度の靈	河村 晴道	後見	林 宗一郎
ワキ/旅僧	宝生 欣哉		田茂井廣道
ワキツレ/従僧	小林 努	地謡	片山九郎右衛門
ワキツレ/従僧	宝生 尚哉		青木 道喜
アイ/里人	島田 洋海		浦田 保親
			片山 伸吾
			松井 美樹
笛	斉藤 敦		橋本 忠樹
小鼓	成田 奏		河村 和貴
大鼓	渡部 諭		樹下 千慧

大蔵流 狂言 蝸 牛

シテ/山伏	茂山 茂	後見	島田 洋海
アド/主人	井口 竜也		
アド/太郎冠者	茂山千之丞		

—— 休憩 15分 ——

(4時15分頃)

親世流 能 望 月

シテ/小澤刑部友房	吉浪 壽晃	後見	井上 裕久
ツレ/安田友治の妻	浦部 幸裕		橋本 光史
子方/花若	吉浪 咲紀		大江 広祐
ワキ/望月秋長	福王 知登	地謡	橋本 雅夫
アイ/秋長に仕える者	茂山千五郎		河村 和重
			河村 博重
笛	竹市 学		味方 團
小鼓	吉阪 一郎		松野 浩行
大鼓	谷口 正壽		宮本 茂樹
太鼓	中田 弘美		鷲尾世志子
			谷 弘之助

附 祝 言

(終了予定 6時頃)



会場へのアクセス

- ・JR徳島駅より、徳島バス藍住線「藍住役場前」下車、徒歩5分
- ・JR徳島駅より、車で25分
- ・JR勝瑞駅より、車で10分
- ・高速道路 藍住IC、車で7分

※ホール周辺の駐車場が満車の場合は、藍住町役場周辺の駐車場をご利用ください。

能 忠 度

平忠度の和歌の師匠でもある、藤原俊成に仕えていた僧(ワキ)が西国行脚に出る。途中、須磨の浦(兵庫県)で薪を運ぶ尉(前シテ)に出会い、一夜の宿を乞う。尉は忠度の和歌を引き合いに、桜の木蔭ほどの宿はないと言い、「行き暮れてこの下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし」と詠んだ忠度がここに眠っていると僧に教え、回向を頼む。僧が念仏を手向けると、尉は喜び、忠度の霊であることを暗示して姿を隠す。(中入)

その夜、花の木蔭に仮寝した僧の前に、甲冑姿の忠度(後シテ)の霊が現れ、都落ちの途中、俊成のもとへ立ち帰り、後日の勅撰集への和歌を託したこと、岡部六弥太と戦い討ち死にしたこと、死後腰の籠に着けた短冊の名から忠度と知られたことなどを語り、桜の花の蔭に消えてゆく。



シテ 河村晴道

平家物語を題材にし、花に無常観を託した名曲。作者の世阿弥自身、この能を「上花」と高く評価していた。

狂言 蝸 牛

長旅に疲れた山伏(シテ)が藪に入って休んでいる。そこへ、主人(アド)に蝸牛を取ってくるよう命じられた太郎冠者(アド)がやってくる。蝸牛は藪におり、頭が黒く、腰に貝をつけているという。太郎冠者が寝ていた山伏をそれかと思ひ尋ねると、山伏はからかってやろうと信じさせ、「でんでん、むしむし」と音頭をとって楽しむ。迎えに来た主人が、あれは山伏だと注意しても、太郎冠者は山伏に誘われると、ついまた囃しだしてしまう——。

能 望 月

信濃国(長野県)の安田庄司友治は従兄弟の望月秋長(ワキ)と口論の末に討たれたため、一家は離散。家臣の一人であった小澤刑部友房(シテ)は、いまは近江国(滋賀県)の守山で宿屋の亭主になっている。一方、友治の妻(ツレ)と遺子の花若(子方)は、敵の手を逃れて旅に出るが、はからずも旧臣である友房の宿屋に泊まることになった。そこへ今度は、都へ上っていた望月が、従者と共に帰郷の途中、同じ宿屋に泊まり合わせた。敵討ちの時節到来と、友房の計画により、旧主の妻を盲御前に仕立て花若に手を引かせて望月の屋敷へ連れてゆき、下向祝の慰みにと、曾我兄弟の仇討ちの物語を語り、花若には八撥を打たせ、更に友房も獅子舞を見せる。つづいての余興の面白さと酒の酔いに望月が眠り伏した隙を見て、首尾よく討ち果たし、本望を遂げるのだった。



シテ 吉浪壽晃

劇的な構成をもつ「現在能」。獅子舞があることで重い習とされている。

- ◆主催者が許可した方以外の写真撮影・録音・録画はお断りいたします。
- ◆上演中は、携帯電話など音や光を発する機器の電源はお切りください。
- ◆都合により、出演者、その他が変更になる場合がありますので、予めご了承ください。
- ◆公演中止の場合を除き、購入されたチケットの払い戻しはできません。